

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第19集

KANA I JHOU SEKI  
金 井 城 跡

長野県佐久市大字小田井金井城跡発掘調査概報

1989

佐久埋蔵文化財調査センター

# 例 言

1 本書は昭和63年度小田井工場団地造成事業に伴う、埋蔵文化財発掘調査の概報である。

2 調査委託者 長野県土地開発公社

3 調査受託者 長野県佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

4 発掘調査所在地籍

金井城跡（略称 ONK）

佐久市大字小田井1081-1・2、1087、1091、1092-1~3、1093、1094、1095、1096、  
1097-1、1098、1099、1100-1、1101-1、1102-1、1103-1・2・3、1104、1105、1106  
-1、1107-1~5、1108-2、1109-1~3、1110、1115-1・3、1116、1117-1・2、1118-  
1・2、1119-1・2、1120-1、1121、1125、1126-1、1129、1130-1、1131-1~3、1132、  
1133-1、1134、1135、1138、1139-2、1140、1141、1142、1143、1146、1147-1、  
1148、1149、1150、1151-1、1152-1、1153、1154、1155-1、1156、1213、1214、  
1215-1~4、1220、1222-1・2、1226、1243-1・2、1248、1255-1・3・4

5 調査期間および面積

昭和63年3月28日(月)～11月28日(月)、昭和63年12月12日(月)～平成元年3月31日(金) 80000m<sup>2</sup>

6 調査団の構成

事務局 佐久埋蔵文化財調査センター

所長	西沢正巳	調査係主任	高村博文
庶務係長	畠山俊彦	調査係	三石宗一
庶務係	田中芳美(嘱託、昭和63年12月退任)	木内晶義	
	菊池直美(臨時職員、平成元年2月就任)	小山岳夫	
		須藤隆司(昭和63年8月就任)	
		小林真寿(昭和63年8月就任)	
		翠川泰弘(昭和63年9月就任)	
		竹原学(昭和63年9月就任)	
		助川朋広(昭和63年9月就任)	
		篠原浩江(昭和63年4月就任)	

調査団

団長 黒岩忠男(佐久考古学会副会長)

調査指導者 大井隆男・木内寛(佐久市誌編纂委員)、白倉盛男(佐久考古学会副会長)、

井出正義(佐久考古学会事務局幹事長)、市川隆之・河西克造(長野県埋蔵文化財センター調査研究員)、林幸彦・羽田卓也(佐久市教育委員会)

調査担当者 高村博文

調査主任 小山岳夫

調査副主任 三石宗一・小林真寿・翠川泰弘・竹原学・篠原浩江・須藤隆司・助川朋広

調査員 井上行雄・大井今朝太・佐藤敏

調査補助員(五十音順) 井出百合子・臼田俊保・大井恵美子・神部妙子・木島美子・小林幸子・田中夏江・橋詰勝子・橋詰けきよ・宮川百合子・山崎平八郎・和久井義雄

協力者(五十音順) 市川和子・市川恒男・飯田チヨ子・飯田すえの・井出つねじ・井出愛子・井出安生・五十嵐勝吉・市村千鶴・今井貴美子・上原あや子・上原幸子・上原美恵子・江原富子・尾沼けさと・大井キセ・小田川時江・小田川栄子・小田川栄・勝俣富美代・金沢花子・金井延・木内明美・工藤豊・棚沢三之助・高地正雄・小平路子・小平昌子・小林満子・小林とめの・小林邦雄・小林まさ子・小林洋子・小林明子・小山林一・小宮山智代子・斎藤義男・斎藤一美・佐藤玉枝・酒井豊子・酒井ひき・塙川佐知子・塙川もり枝・重田文枝・篠原信子・関口正・関口与志子・高橋かね子・高橋茂・高橋良市・高橋冬子・高橋かをえ・高橋恒代・高橋ふみ・高山ミツ子・田中タツ子・田中智恵子・滝沢澄子・武井豊子・田村祐子・角田良夫・角田時・樋田咲枝・中山雪子・中山弥太郎・中山たのし・中山いつ代・長岡喜代人・中田恵子・西川しづ子・原田登里代・花岡美津子・花里きしの・樋沢しづい・樋谷みゆき・村松とみ子・森川宗治・森角せきよ・森泉富美子・森泉源治郎・森泉欽一・森泉好治・茂木とよ子・柳沢千賀子・柳沢江い子・柳沢千波・柳沢典子・柳沢豊志子・矢野きく江・山崎直・渡辺はつ子・渡辺まさじ・若林けさい(以上、地元協力者)

荒井かつ・荒井寅雄・市川初太郎・江口まさ江・黒木久夫・須江勝・角田すい・中山はるい・平川かめよ・柳川正明(以上、シルバー人材センター)

上原和義・落合朋之・木内由佳里・長岡孝・中村昭二・花岡秀和・柳沢晃・山崎博文・油井健二(以上、大学生・専門学校生)

浅川隆志・市川由美子・井出邦親・加藤知美・金井明子・金沢恵・小林隆一・桜井朋春・佐藤裕香・高橋博光・三浦まき・茂木正博・柳沢美弥子・山村達之・由井隆子(以上、高校生)

7 本書の編集は小山・小林・翠川・竹原・篠原が共同で行い、執筆は第二章を白倉が、他の章

は、調査主任・副主任が分担して行い、文責は文末に記した。

- 8 本書は佐久市教育委員会の責任下に保管されている。また、金井城跡の出土遺物等すべての資料は、現在、佐久埋蔵文化財調査センターにおいて整理・検討中である。

本調査において、荒田区長高橋次男氏、小田井下宿区長若林栄太郎氏、相澤政一氏ほか、地元の方々には、発掘調査中、数々のご協力およびご援助をいただき、また、調査概報作成に当たっては、奈良女子大学助教授村田修三先生をはじめ、下記の各氏よりご指導・ご助言をいただきました。記して感謝いたします。

浅野晴樹、今井 宏、宇賀神誠司、臼田武正、栗原文藏、小森哲也、小平恵一、小林秀行、近藤尚義、桜田 隆、篠沢 浩、島田恵子、千田嘉博、堤 隆、寺島俊郎、中井 均、花岡 弘、福島邦男、丸山敏一郎、百瀬新治、百瀬忠幸、森泉かよ子、由井茂也（敬称略 五十音順）

## 目 次

### 例 言

第Ⅰ章 発掘調査の経緯	1
第1節 発掘調査に至る動機	1
第2節 調査日誌	3
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	4
第1節 金井城跡周辺の地形と地質	4
第Ⅲ章 基本層序	7
第Ⅳ章 調査の成果	8
第1節 検出された遺構・遺物	8
第2節 城郭の全体像	8
第3節 各遺構の概要	12
1) 竪穴建物址	12
2) 掘立柱建物址	12
3) 土 坑	12
4) 柱穴・柱穴列	12
第4節 まとめ	13
1) 遺構から	13

## 第Ⅰ章 発掘調査の経緯

### 第Ⅰ章 発掘調査に至る動機

金井城跡は、佐久市の北端部、湯川右岸の標高750～780mをはかる広大な中金井遺跡群の南東に位置する。

中金井遺跡群は「佐久市遺跡詳細分布調査報告書」で弥生～平安時代の複合遺跡と周知されている。一方、金井城跡は「御代田村誌」など文献資料で約600m北方の小田井城の支城という伝承が残っていたが、発掘調査、現地踏査などは十分に行われていた訳ではなく、遺跡・城郭の歴史的重要性が指摘されることなく今日に至っていた。

昭和60年、本城郭内において佐久市による小田井工場団地造成事業が企画され、その後、長野県が造成を行うこととなった。これに伴って行われた現地踏査で作成された城郭の縄張図によつて、金井城が佐久地方屈指の巨大な規模をもつことが確認された。また、昭和62年には、道路新設工事も行われ、11月、遺跡群西端中央部で荒田・上金井遺跡の発掘調査が行われた。この際、検出された溝状造構2条は、城郭との関連性が指摘された。

このようにして、本城郭の重要性が日々増してくるさなか、昭和62年12月に城郭の範囲・内容確認を前提とした試掘調査が佐久埋蔵文化財調査センターによって実施された。この結果、縄張図で想定された堀よりも更に数条の多枝にわたる堀が城郭内にめぐらされ、巨大な規模、複雑な構造を有していること、竪穴建物址、掘立柱建物址、土坑など相当多数の15・16世紀の中世遺構が内包されていることなどが確認された。これらの遺跡・城郭に関する事実をふまえて、長野県土地開発公社、長野県教育委員会文化課、佐久市教育委員会の三者で保護協議がもたれたが、結局、破壊やむなきにいたり、佐久市教育委員会が長野県土地開発公社からの記録保存を前提とした発掘調査委託を受け入れることとなった。その後、佐久市教育委員会は、佐久埋蔵文化財調査センターに再委託契約を提示し、これを受けた当センターが発掘調査を実施する運びとなった。



第1図 金井城跡および周辺城郭の位置（国土地理院地形図より）

## 第2節 発掘調査日誌

本調査は、昭和62年度実施の試掘調査を基礎データとして、計画を立案し、昭和63年3月より、現地調査に踏み切った。本年は、記録的な天候不順の年で、調査開始直後の3月29日、結団式が行われた4月7日、そして晩秋の10月29日には多量の積雪、6・7月は度重なる降雨に見舞われ、調査の遅滞を余儀なくされたが、地元の人々の絶大な協力もあり、11月28日、立木の伐採予定地、植木屋の移転予定地、未買収地を除く、本年度調査可能地区約80000m<sup>2</sup>の大発掘調査を完遂し得た。この間、10月15日には地元住民を対象とした現地説明会も実施し、本調査の重要性を広くアピールする活動も行った。尚、本調査の詳細な経過については第1表にまとめてあるので参照されたい。

現地調査終了後、12月～平成元年3月にかけては、遺物水洗・保存処理、遺構図面の整理等の作業を行い、本城郭の実態究明の為の基礎資料作成に努めた。  
(小山)

第1表 金井城跡発掘調査経過表

年月 作業名	S63 3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
発掘準備	実地調査 測量 測量 測量								測量
耕作土除去 (重機)	1地区		2地区			3地区	3,4地区	4地区 6地区 5地区 6地区	
遺構プラン確認	1地区			2地区			3地区 4地区	5地区 6地区	
遺構振り下げ		1地区		2地区			3地区 4地区	5地区 6地区	
遺構測量	プラン確認	1地区	1地区	1地区	1地区		3地区 4地区 5-6地区		
写真撮影			1地区		2地区		3-4地区 5地区	5地区	
全面清掃					1地区	2地区		3-4地区 5-6地区	

## 第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

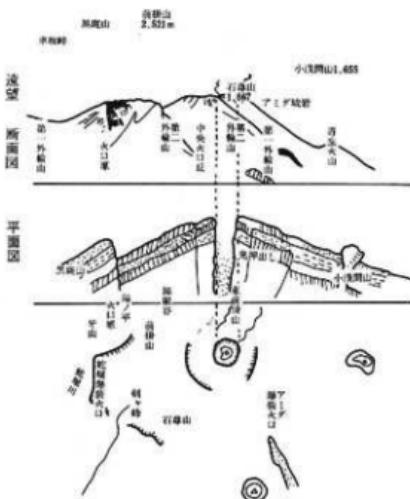
### 第1節 遺跡の自然環境

この遺跡は佐久市の最北端の中金井遺跡群と小田井部落の境に位置している。この付近一帯は北方に聳えている浅間山の噴出物によって地質構成されている地帯で、この地域環境を記載するにはまず浅間山の構成から始めなければならない。

浅間山は群馬県境の上信越高原国立公園の最南端にある火山で日本の中においても珍しい代表的な活火山で現在も盛んに噴煙を上げていることで知られている。それに加えて研究史の長いこと、火山活動の記録が古くから残されていること、火山形態が各面から具備していることなどにもより、我国東西交通の要路中仙道・信越線沿いにあり、活動している火山として時に大噴火をして周辺に災害を及ぼすこともあり、四季の風景の変化の素晴らしさによって、古来文学・絵画の対象ともなり多くの作品も残されている。

浅間山は黒斑山・前掛山・中央釜山の三重式成層火山で標高2560m、四方からの眺望の変化もあり、しかも常に噴煙を続けているので人目につき易いが、特に南方佐久市側から見渡す形態が実に素晴らしい。火山構造も含めて図示したものが第1図であるが、コニーデ型の裾野と三重式噴火口寄生火山火口瀬など火山の模型をみるようである。しかも噴煙は上空の偏西風によって東に傾くことが多いため大噴火による灾害も南側に及ばないのが現状である。

しかし、長い火山活動の歴史をたどってみると南方佐久市側にも噴火の状況を語る噴出熔岩火山灰火山砂礫の堆積層が多く残されている。浅間山は我が国の中としては最も新しい若い火山で第1次黒斑火山の活動を開始したのが新生代四紀



第2図 浅間山の形態と構造（白倉原図）

洪積末期であるが、黒斑火山最盛期には単式成層火山で標高2800mを越える大型火山であった。

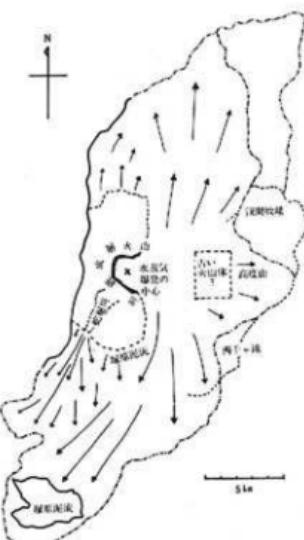
その整然とした大火山は噴火口の半分以上を破壊する大爆発によって山体を失ってしまった。その時の噴出熔岩熱水泥流の大部分が主として南方に流下して佐久市中佐都付近まで押し出している。

その堆積物は現在JR中佐都駅付近を中心として塙原赤岩部落付近の田園地に散在する松島湾に浮かぶ松島のように並んでいる泥流残丘である。基盤整備以前はその数100を越す大小残丘が浅間山頂方向から放射状に並んでおり、地名の起源にもなっていた。岩質の研究結果から黒斑岩壁に残っている岩石と同一であることが実証されている。

その破壊された黒斑火山の中心から再び活発な火山活動が再開されたのが前掛山に成長するわけであるがその過程の長い期間の多量な噴出物である火碎流軽石流（熱火山灰砂軽石）と降下火山灰砂が二回に亘って佐久市北半部に厚さ20cm以上に堆積した。これは浅間山南面追分原以南・佐久市中込原、西端は小諸市懐古園付近まで広範囲223km<sup>2</sup>に亘って分布して佐久平北半部の生活地表面を形成して第一・第二軽石流と呼ばれている（第一軽石流をP1、第二軽石流をP2と命名されている）。この軽石流は一時湯川を埋め、一部に湖沼状態も作り、浅間火山山麓凹凸地形面を平坦化した。この大規模な第一軽石流と小規模な第二軽石流の間に100年以上の間隔があったらしく20cm内外の黒土層を挟んである所もある。

この軽石流P1・P2の地表面が佐久市北半部を形成しているが、この地層は火山から噴出したままの火山灰砂軽石の堆積したままのもので凝固していないために水の浸食には頗る弱く豪雨洪水には極めて大きな地形変化を受ける。従って、この地帯には火山山麓特有な“田切り”地形が発達している。最大なものとしては床和の谷をはじめとして浅間山麓に深い田切りの谷が50余発達しており、山麓湧水地下水の流下通路となっており、これらが古代からの稻作耕作を支えている。

浅間山麓標高1000m内外に分布する湧水（湧玉・湧り・白糸・千ヶ滝）火口湖蛇堀川などの浸食作用がこれをつくったわけである。湯川の谷も田切りの最大なものとみることができる。浅間山麓には田切りの深い谷はその数合わせて50を越えている。本遺跡の東側湯川の断崖面で厚さ約

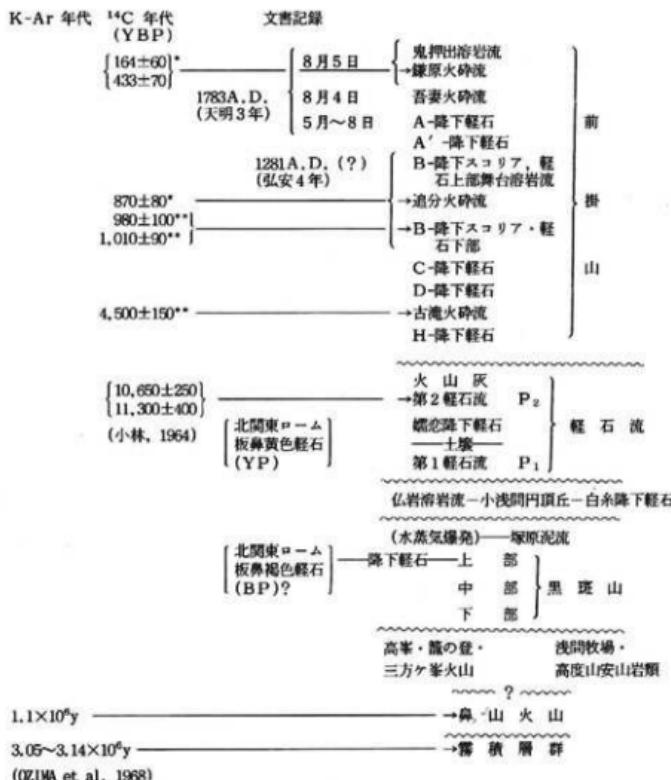


第3図 黒斑山東部の破壊によって生じた泥流および流下した状態を示す図(荒牧・浅間山の地質)

25m が計られた。これが今まで調査された最大値である。田切りは山麓湧水地下水の流下路ともなっており、弥生時代以来この周辺標高 750 m 以下の稻作耕作を支えてきたと考えられ、田切りの分布と遺跡分布の古い集落分布には極めて深い関係が見られる。

中金井遺跡群は、東南二面は湯川の断崖に囲まれ、西面は濁川とその分流の深い天然の谷に守られた自然の要害の地として、戦国攻防の要地として築城の効を見抜いて金井城が造られたのである。その炯眼に敬服せざるを得ない。

(白倉)



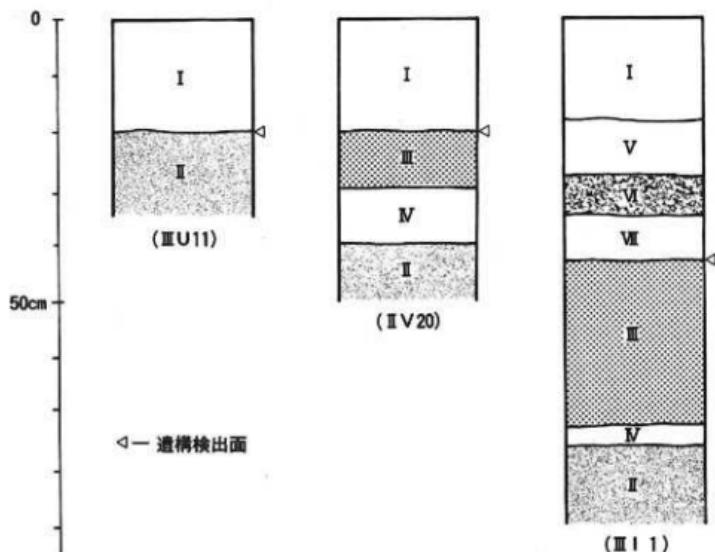
第2表 浅間山を中心とした編年

- 参考文献 白倉盛男 1971 「浅間山と火山博物館」 小諸市立火山博物館  
荒牧重雄 1968 「浅間火山の地質」 地学団体研究会

### 第Ⅲ章 基本層序

金井城跡における基本土層は、以下に示した柱状断面図のごとくである。地点によって確認面に若干の相違はあるが、いずれの地区も第Ⅱ層輕石流を基盤とする。

(小林)



- |           |                |      |   |
|-----------|----------------|------|---|
| I—灰黄褐色    | 10YR 1/2       | 耕作土  |   |
| II—黄 橙 色  | 10YR 4/6       | ローム層 | 浮石を多含する。                                      |
| III—黒 色   | 10YR 1/2 ~ 1/4 |      | 浮石・ローム粒子 (10YR 1/2) を少量含む。                    |
| IV—ぶい黄橙色  | 10YR 4/6       | 漸移層  | II・III層の混在。下層ほど浮石の含有率が高い。                     |
| V—ぶい黄橙色   | 10YR 4/6       | 砂礫層  | 5%大のローム粒 (10YR 1/2) ・黒色粒 (10YR 1/2) ・浮石を多含する。 |
| VI—ぶい黄橙色  | 10YR 4/6       | 砂 層  |   |
| VII—ぶい黄橙色 | 10YR 4/6       | シルト層 | 1cm大の黒色粒 (10YR 1/2) を含む。                      |

第4図 金井城跡基本土層柱状断面図〔〕内はサンプル抽出グリッドを示す〕

## 第Ⅳ章 調査の成果

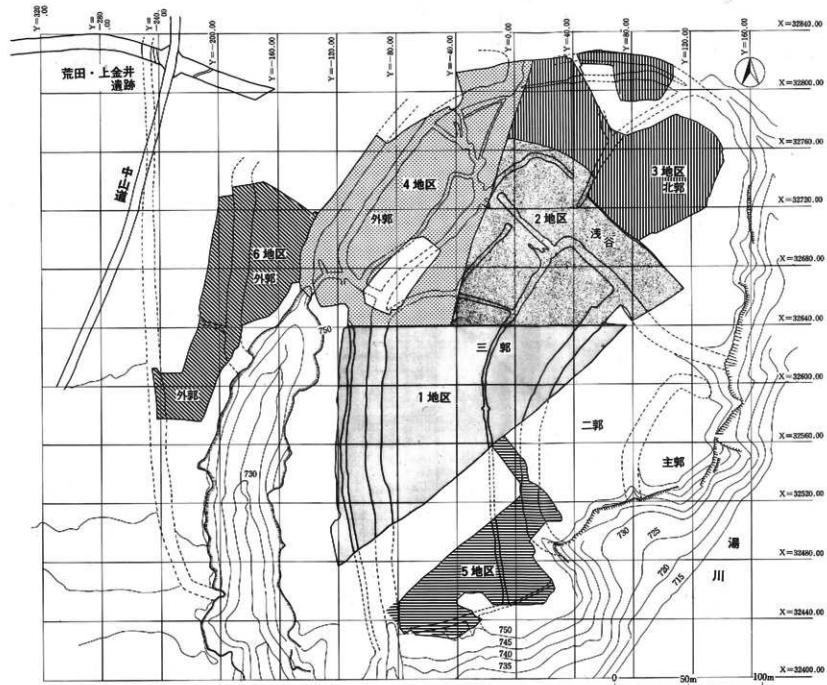
### 第1節 検出された遺構・遺物

遺構	中世	竪穴建物址	498棟	遺物	縄文時代	土器・石器	ごく少量
	(柱穴あり)	53棟)		弥生～			
	(周溝あり)	35棟)		平安時代	土器		ごく少量
	(施設なし)	410棟)		中世	土器		
	掘立柱建物址	約50棟			内耳土器		
	土 坑	743基			かわらけ		
	特 殊 遺 構	1基			陶磁器	計 15箱	
	ビ ッ ト	約5000基			金属器		
	堀・溝状遺構	34条			鍔の小札		
	(うち、堀は)	26条)			刀子ほか	多數	
	堀に並走する落ち込み	6基			貨幣	多數	
					石製品	テンバコ	
	(遺構数については今後の検討により若干の増減あり)				石臼・茶臼ほか	30箱	

### 第2節 城郭の全体像 (第4・5図参照)

本城郭は堀とそれに並走する土塁によって仕切られた複数の郭によって構成される典型的な中世城郭で、城域の総面積は約20万m<sup>2</sup>を越えると考えられる。特有の「田切り」地形の台地上を利用した城郭が数多く発達する佐久地方の中でも屈指の規模をもつ。湯川右岸・河床との比高差30～40mの切り立った断崖上の平坦地(標高750m内外)を利用して築城されているため、城郭の東・南・西側は自然の要害に堅く守られ、平坦地が続く城郭北側は多数の堀を幾重にも巡らして、堅い防衛網を敷いている。

土塁は現存していないが、堀址は大規模なものについては現状でも埋まり切らずに蘊んでいたため、踏査の段階から南東側崖縁を基点として扇型に展開される全体形状をもつことが分かっていた。南東側崖縁は城郭の構えから見れば最奥部に当たり、「主郭」と命名した。主郭から西に



第5図 金井城跡発掘区 設定図 (1:2500)

広がって行く大小9条もの堀によって仕切られた各郭については、主郭寄りの東側から順に「二郭・三郭」とし、それ以西の郭については「外郭」と命名した。また、主郭～三郭の北方には幅20m前後の埋没が著しい渓谷地形があり、これを挟んで対面する北側の四角い郭を「北郭」と命名した。

本調査によって、露呈された城郭の範囲は、およそ80000m<sup>2</sup>におよび、二郭の一部分、三郭・北郭の大部分、外郭の半分以上の構造が明らかにされた。主郭については保護対象地とされたため、今回は全く調査されなかった。以下に、全体構造がほぼ推し量れる三郭・北郭を中心に関連構の検出状況を簡単に記しておく。

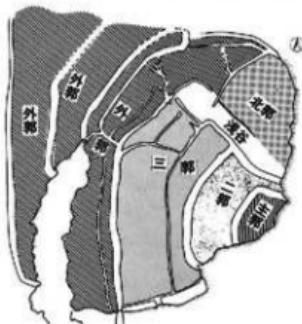
三郭は総面積約30000m<sup>2</sup>の広大な範囲を有する。郭内は東側に縱割りの細長い堀、北西側に長方形区画の細い堀が設けられて仕切られている。検出された遺構は竪穴建物址、掘立柱建物址、土坑、建物として把握できない柱穴・柱穴列などが多量にあり、それぞれが組み合わせて密集した分布状態を示している。今後の検討によって、これらの建物址を中心とする遺構群の時期的な変遷の把握、同時期遺構のまとまりの抽出なども可能と思われる。このほか、縱割りの堀2条と東西に走る堀1条の内側には、2～3mの一定間隔をおいて断続的に並走する落ち込みも見られた。この落ち込みは不整形のプランで鉢鉢状に不明瞭な掘り込みを有する、その中に方形竪穴を付属するものもある、などの形態的特徴が見られるが、城郭の中にはあってどのような役割を果した遺構であるのかについてはよく判らない。ただし、堀とこの落ち込みの隙間に遺構が皆無に近いため、この部分に土塁があったと想定しても大過ないと思われ、落ち込みは土塁に接し、関連するなんらかの施設であったと言う考えも成り立つ。いずれにせよ、この特徴的な落ち込みについては、数少ないかもしれないが今後、類例に当たって機能を解明したい。

二郭については西端部が調査されているのみであるので全体像は判らないが、断続的な落ち込みがある点、竪穴建物址・掘立柱建物址・土坑・柱穴および柱穴列が混在する傾向は三郭とさして変わらない。

北郭は、二・三郭とは若干様相を異にする。堀の内側には断続的な落ち込みがなく、竪穴建物・掘立柱建物址・土坑・柱穴・柱穴列などが密集して混在する点は変わらないが、竪穴建物址は一様に厚い土壁を有するなど二・三郭ではみられなかった構造をもつ。

外郭は、各遺構の分布状況が一変して希薄になる。特に外郭の最西端地区では遺構は皆無となる。このような遺構の分布状況から外郭は、居住区として機能した可能性は薄い。

(小山)



第6図 金井城略図 (1:8000)

### 第3節 各遺構の概要

#### 1) 穴室建物址（第7図～第16図）

二・三・北郭を中心に498棟が検出された。ここで言う穴室建物址とは、方形・長方形を基調とし、壁の立ち上がりが垂直に近く、床が平坦で踏み固められていて、何らかの上屋が架かった施設が想定できる遺構に対して用いることとする。柱穴を有するタイプ、周溝を有するタイプ、付属施設をもたないタイプの3タイプがあり、大きさは一辺1.3mの小規模なものから一辺5～6cmの大規模なものまで様々である。付属施設をもつものは少なく、炉をもつものは3例、入り口状の張り出し施設を有するものは他の郭と異なった構造（版築された厚い土壁が作られる。第8図参照）をもつ穴室建物址が密集する北郭に比較的多いほかは、僅かである。この他、穴室建物址はいずれも人為的な埋没状況を示す点にも共通性がみられる。詳細な穴室建物址の類型化、機能の追及については本報告に譲りたい。

#### 2) 掘立柱建物址

二・三・北郭を中心に約50棟検出された。大規模なものはなく、柱間は一間×二間のものが多く、長辺6～8m、短辺4～5m、柱穴は径20cm内外と概して細く貧弱で、四角ばったものが多い。穴室建物址に近接してほぼ同じ方位で位置することが多く、両者の間に有機的な関連があったことを示唆していると思われる。また、柱穴を結んだ範囲内に存在する土坑などは、付属施設となっていた可能性もある。本報告では性格の特定に努めたい。

#### 3) 土坑

穴室建物址・掘立柱建物址が密集するエリア（二・三・北郭）では必ず大小様々な形態の土坑が検出された。総数で748基を数える。一方、建物址が希薄な外郭では、土坑もそれに準じて検出数が少ない。従って、今回の調査で検出された土坑は、中世の建物群と密接にかかわるものであったと考えることができる。通常の調査で性格の特定が困難な遺構であるが、今回はある程度、土坑の本質に迫れるかもしれない。

#### 4) 柱穴・柱穴列

土坑の分布状況と同じく、中世の建物群が密集するエリアに多く存在する。総数で約5000基確認された。径20cm以下の小形のものが多く、柵列状に並ぶものもあるが、全くバラバラに分布するもののほうが多い。建物・柵以外の機能も想定しなければならない訳で、やはり今後の検討課題である。

(小山)

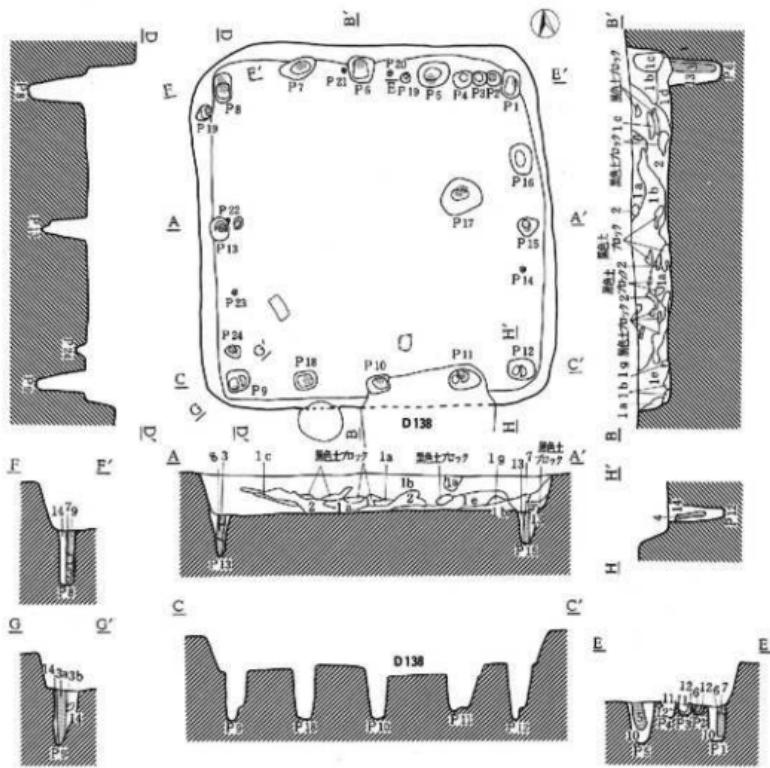
## 第4節　まとめ

### 1) 遺構を総合的に見て

今回、市町村の単年度調査としては破格の80000m<sup>2</sup>が掘り尽くされた。遺跡保護の面から見れば、周知の城郭を開発することは、必ずしも好ましいことではないが、調査によって得られた資料は、歴史的意味が極めて大きなものであった。以下に調査終了時点における所見を簡単に述べ、本報告へ向けての課題を提起しておこう。

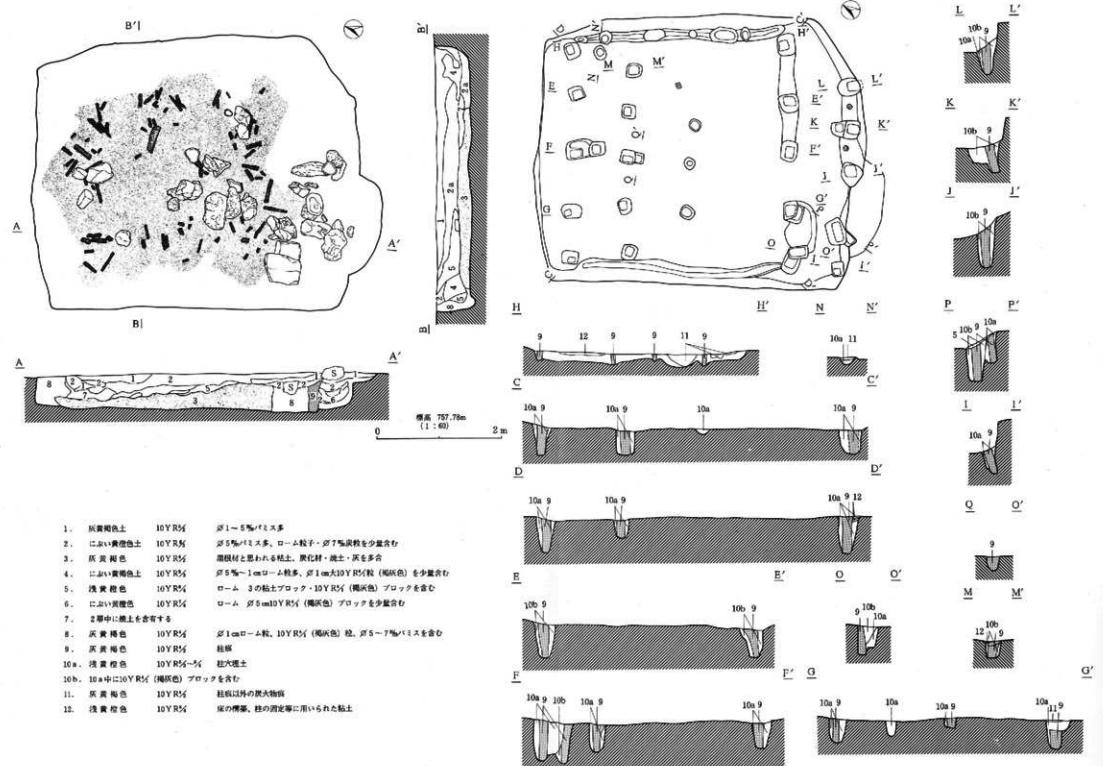
検出された遺構は、城域内に厳重に巡らされた大小の堀跡のほか、多数の竪穴の建物址・掘立柱建物址・土坑・柱穴・柱穴列等ほとんどが中世・戦国時代にかかるものばかりである。そしてその建物の大部分は小規模なものであった。その分布状況は、当時の城域内において粗末で貧弱な建物が林立していた戦乱時の懐ただしい眺観を彷彿とさせるものである。また、今回の調査では井戸は全く検出されなかった。おそらく、当城域内には井戸はないと思われる。城域内において仮に一時的にせよ生活を営むのであれば、必ずどこからか水を供給しなければならなかつたはずである。火処も少なかった。多くの軍勢を養う炊事はどこで行っていたのであろうか。そして更に決定的な事には、遺物も極端に少なかった。日常生活を長く行ていれば、必ずごみやガラクタがでる。今回の調査ではそれが余りにも少なかった。城が短期間で廃棄されたと考えられても仕方あるまい。このように当城郭は水の供給源の不明確さ、火処の少なさ、生活用品の少なさなど、生活臭の薄さが極端に目立ち、この辺に性格突明の鍵がありそうである。

そのほかの時代の遺構は皆無に等しく、遺物も縄文時代を始め、弥生・古墳・奈良・平安時代の土器・石器片がごく少量検出された程度である。従って、当城郭形成以前の原始・古代においてはこの地は生活の場としては敬遠されていたと考えることができる。その背後には気候が冷涼であること、水の便が悪いこと、乾燥地帯であることなど、現代にも共通する生産活動に不適な面があったことが指摘できよう。その生産活動不適作地に中世になると忽然と巨大な城郭が構えられた。この意味については、今後の資料整理において検出された遺構群や遺物の検討によって時代を特定するとともに、近接する同時代の城郭小田井城・平原城・曾根城等との相互関連、および、全国の城郭の型式学研究の中における位置付けを行う必要があろう。また、当時の文献などに見られる戦国時代の歴史的背景なども見据えながら多角的に検討することも重要である。これらの目的を達成することが、失われた歴史遺産に対するさきやかな代償である。 (小山)

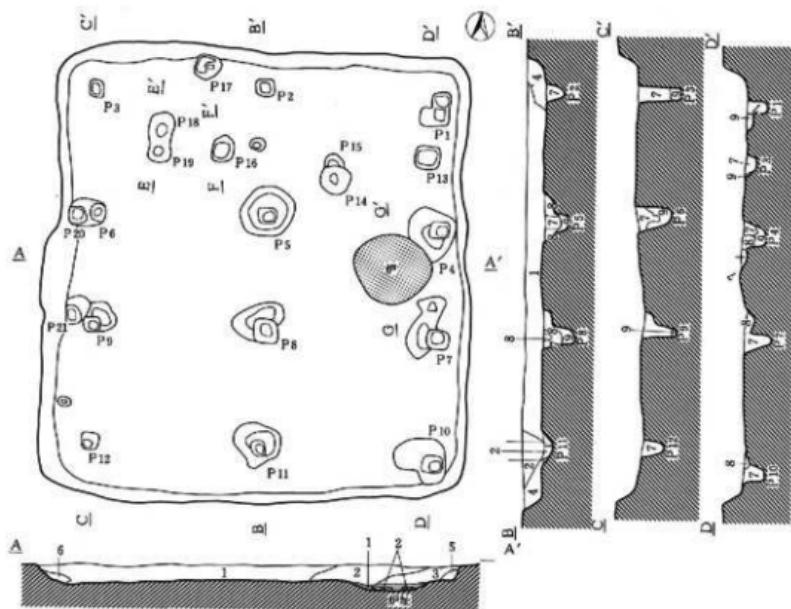


1 a. 黒褐色土	10Y R5/4	砂質	1 b と 2 層の混在	柱基	標高 754.82m (1 : 60)
1 b. 黒褐色土	10Y R5/4	砂質	Ø 3mm前後パミス多、1cm前後ローム少、Ø 3~5mm黒褐色土少		
1 c. 黒褐色土	10Y R5/4	砂質	Ø 1.5mm前後黒褐色土ブロック多、Ø 1cm前後ロームブロック多		
1 d. 黒褐色土	10Y R5/4	砂質	1層中で最もまめ細かい。Ø 3mm前後パミス少、黒褐色土少		
1 e. 黒褐色土	10Y R5/4	砂質	1 b よりやや粒子小さい		
1 f. に bei 黄褐色土	10Y R5/4	砂質	Ø 1cm前後ローム多		
1 g. 明黄色土	10Y R5/4	砂質	*		
1 h. に bei 黄褐色土	10Y R5/4	砂質	砂質傾向最も強		
2. 黒褐色土	10Y R5/4	有機質	きめ細かく粘性強		
3 a. 黒褐色土	10Y R5/4				
3 b. 黒褐色土	10Y R5/4				
4. 黑褐色土	10Y R5/4				
5. 黑褐色土	10Y R5/4				
6. 黄褐色土	10Y R5/4				
7. 黄褐色土	10Y R5/4				
8. 黄褐色土	10Y R5/4				
9. 黄褐色土	10Y R5/4				
					2 m
					入為堆積のため 含物の違いはあるが 基本的に同一層

第7図 第18号堅穴建物址実測図(旧番)



第8図 第217号竖穴建物址実測図(旧番)



記号

- 暗褐色土 10YR5/4 砂質  $\phi 5\text{mm}$  骨頭中  
灰大物少
- 灰黃褐色土 10YR5/4 灰土体  
鐵土粒、灰大物少

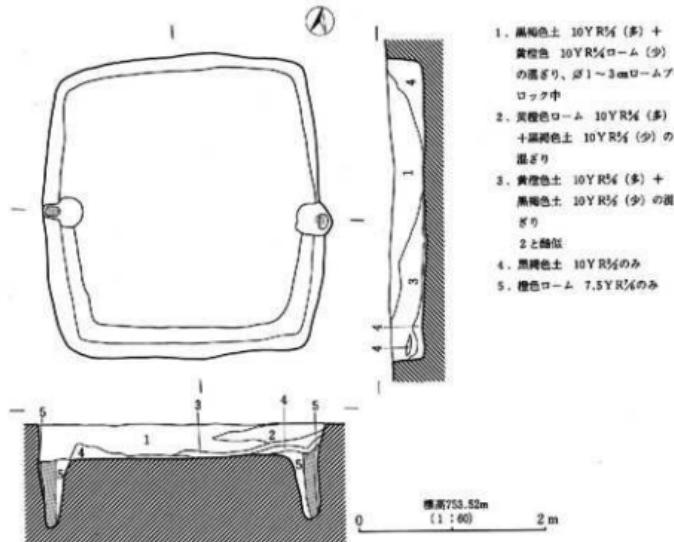


0 (1:60) 2m

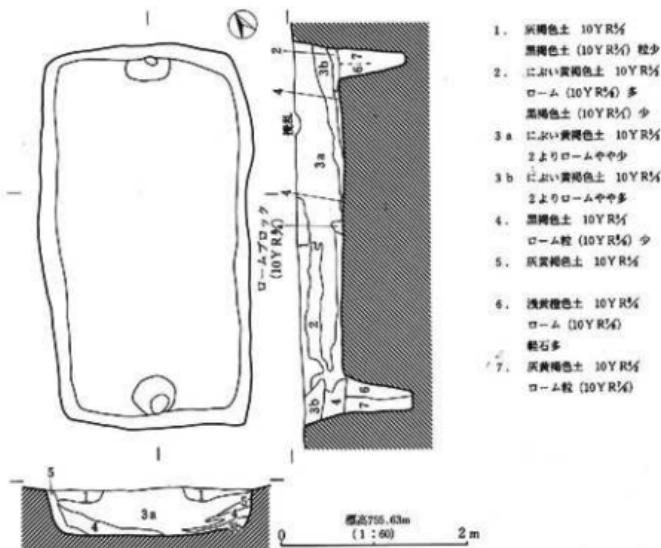
- 暗褐色土 10YR5/4 砂質  $\phi 1.5\text{cm}$ ローム 中、バニス少、 $\phi 1.5\text{cm}$ 黒色土少
- 暗褐色土 10YR5/4 砂質  $\phi 1.5\text{cm}$ ローム 少、バニス少
- 暗褐色土 10YR5/4 砂質  $\phi 1.0\text{cm}$ ローム 少、バニス少、灰粒少
- 暗褐色土 10YR5/4 砂質  $\phi 3.0\text{cm}$ ローム 多、バニス少、 $\phi 1.5\text{cm}$ 黒色土少
- 暗褐色土 10YR5/4 砂質  $\phi 3.0\text{cm}$ ローム 多、バニス少
- 黒色土 10YR5/4 砂質 極粘土
- 黒褐色土 10YR5/4 砂質  $\phi 7\text{mm}$ ローム 少、 $\phi 5\text{mm}$ 黒色土少、ややしまりあり
- 黒褐色土 10YR5/4 砂質  $\phi 1\text{cm}$ ローム 多
- 黄褐色土 10YR5/4 ローム主体 カメ形

} 柱穴内

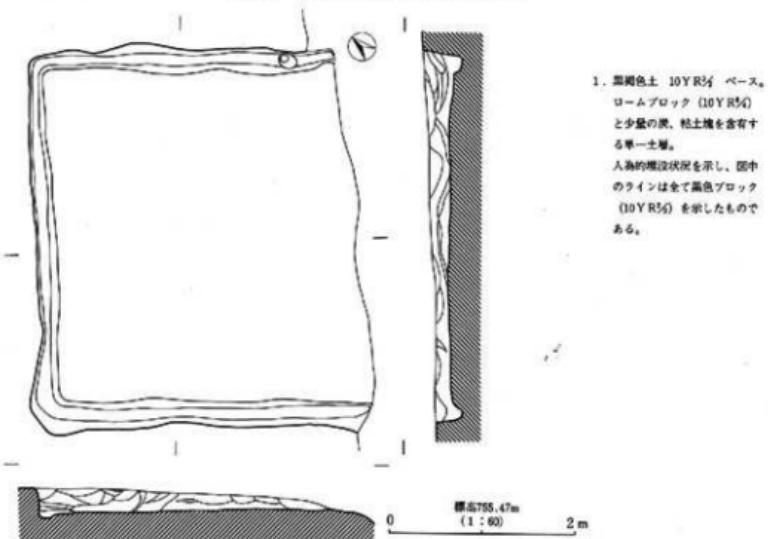
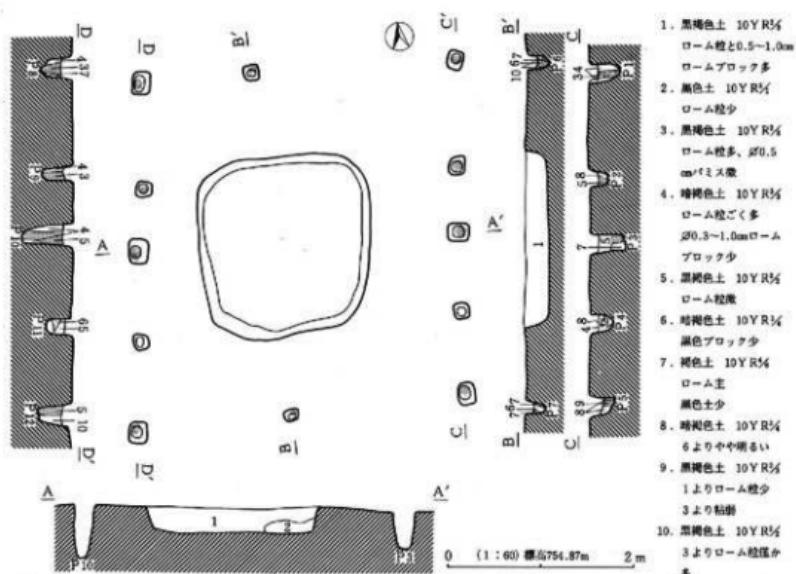
第9図 第371号竖穴建物址実測図(旧番)

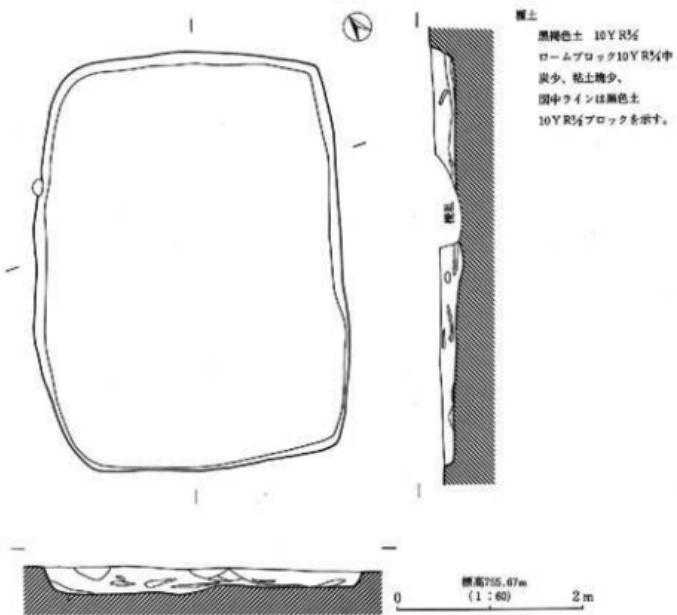


第10図 第31号豊穴建物址実測図(旧番)

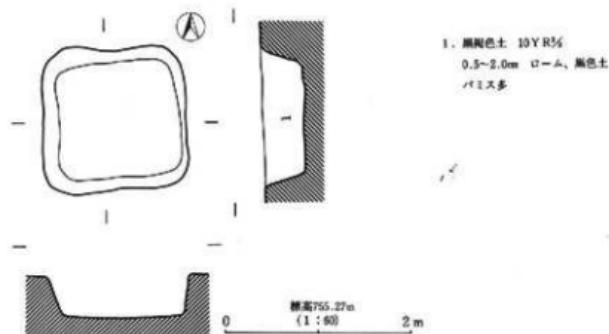


第11図 第149号豊穴建物址実測図(旧番)

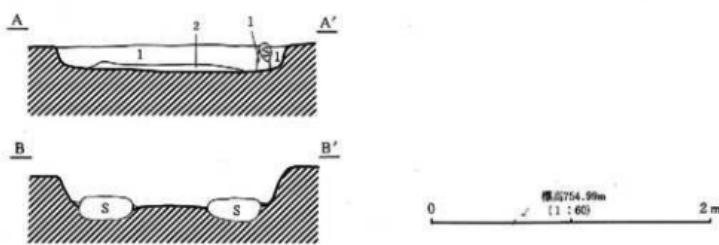
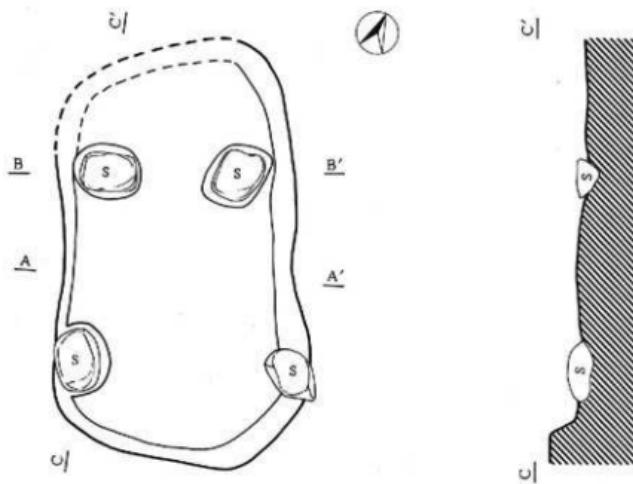




第14図 第1号竪穴建物址実測図(旧番)



第15図 第242号竪穴建物址実測図(旧番)



1. 黒褐色土 10YR5/2  $\phi$ 1・2cm以上多、ローム粒多  
2. 黄褐色ローム 10YR5/6  $\phi$ 0.5cm暗褐色土ブロック多

第16図 第1号特殊遺構実測図(旧番)



1. 金井城跡付近航空写真（株式会社社協同測量社撮影）



1. 金井城跡付近航空写真（南西より）（株式会社協同測量社撮影）



2. 金井城跡付近航空写真（北西より）（株式会社協同測量社撮影）



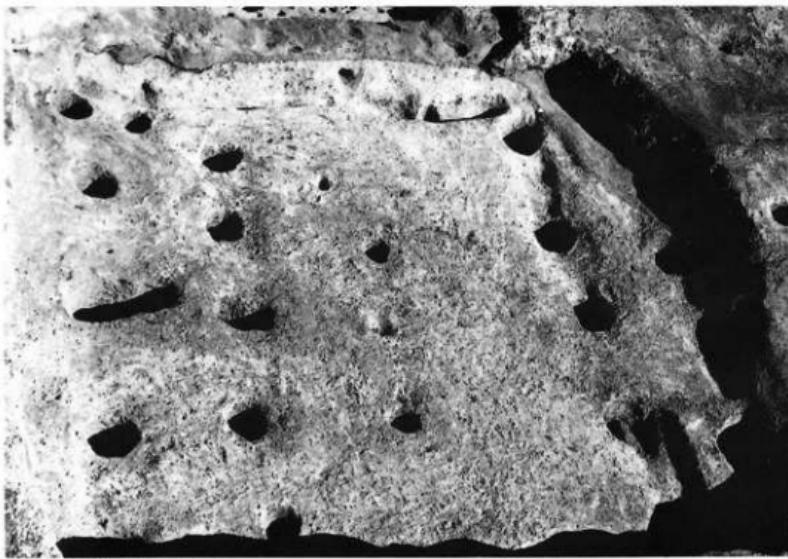
1. 金井城跡付近航空写真（北東より）（株式会社協同測量社撮影）



2. 金井城跡付近航空写真（南東より）（株式会社協同測量社撮影）



1. 第18号整穴建物址（南方より）



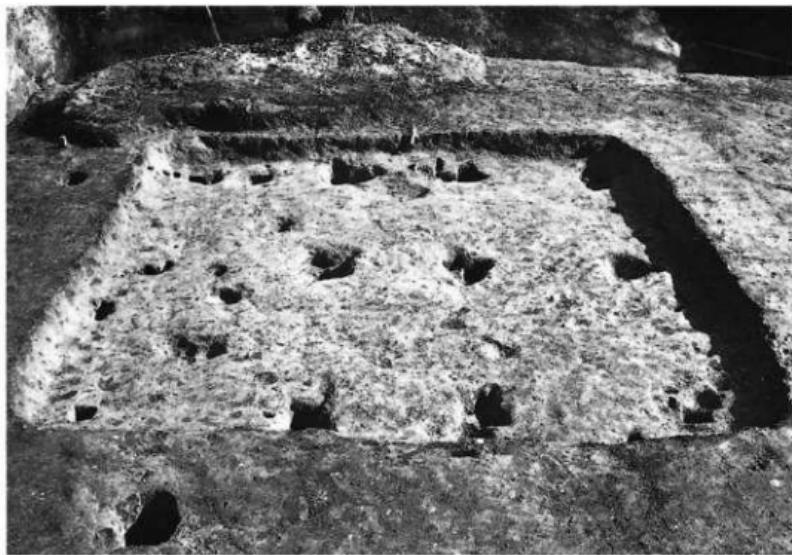
2. 第217号整穴建物址（南西より）



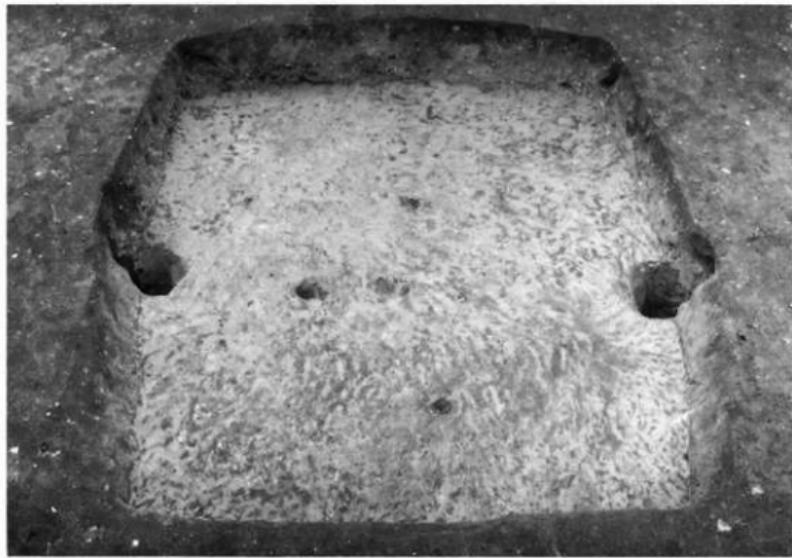
1. 第217号竪穴建物址出土根材出土状況（南西より）



2. 第217号竪穴建物址出土根材出土状況（北東より）



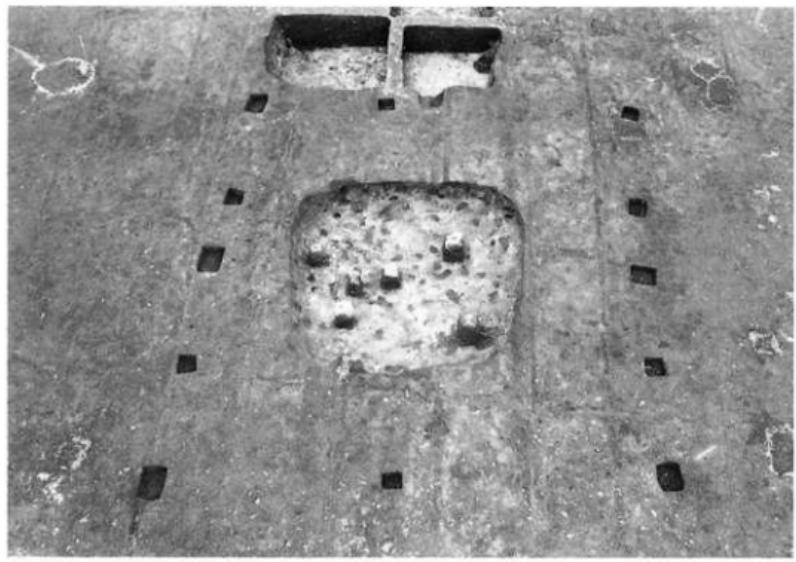
1. 第371号竪穴建物址（西方より）



2. 第31号竪穴建物址（南方より）



1. 第149号整穴建物址（南東より）



2. 第47号整穴建物址（南方より）



1. 第4号堅穴建物址（北方より）



2. 第1号堅穴建物址（北方より）



1. 第242号土坑（南方より）



2. 第1号特殊遺構（北方より）

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第1集	『西高・竹田塚』(TNU NTM)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第2集	『池畠・西御堂』(YIT YMM)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第3集	『芝 風』(ISM)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第4集	『新町 II』(IIM)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第5集	『海上尾敷 下川原・光明寺』(YKY YSK)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第6集	『洪潤・星敷前・西片ヶ上・曲尾Ⅲ・曲尾Ⅳ』 (KAB KYM KNU KMOⅢ KMOⅣ)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第7集	『高師町・西大久保』(ATM SNO)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第8集	『北西の久保』(IKK)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第9集	『型 の 木』(NNN)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第10集	『菅田Ⅲ・新町Ⅲ・宮の上・中曾根・藤塚』 (IIS IIMⅢ YMM INN TFK)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第11集	『長塚古墳群』(UNM)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第12集	『西浜ふた』(KNN)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第13集	『前沢・嵩石』(NAZ IET)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第14集	『轟の峯古墳群』(TNM)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第15集	『勝巻・西大久保 II 曲尾 II』(SKM SNOⅡ KMOⅡ)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第16集	『菟田・上金井 東赤坂 II』(NAK IHZ)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第17集	『前沢 II・御桂板羽・梨の木 II・宮の上 II』 (NAZ II IBZ II NNN II YMM II)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第18集	『森 下』(INN)

### 佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第19集

長野県佐久市

### 金 井 城 跡

1989年3月

編集者 佐久埋蔵文化財調査センター

発行所 長野県佐久市教育委員会

印刷所 信毎書籍印刷株式会社